はじめに

大分医科大学医学部附属病院は1981年10月に開院したので、2001年は20周年にあたる。当初320病床でスタートし、年毎に組織・設備を整え、現在は604病床を有し、診療科、中央診療施設および特殊診療施設の整備状況から、大学附属病院としての一応の体裁は整ったと言える。ことにここ数年、医療情報部、総合診療部及び臨床薬理センターと云った特殊部門が訓令施設として認可され、21世紀医療に向かって着実にinfrastructureが充実しつつある。

昨今の医療を取り巻く環境の変化は著しい。大学附属病院の目的は医療人の育成にあると認識され、今でもそれに変わりないが、医療法の改正によって大学附属病院は特定機能病院として位置付けられている。従って、本院も高度医療の提供、その技術の開発と研修並びに安全管理対策の整備が病院の使命となった。しかし、その前提には患者本位の医療の実施がある。

最近になって、大学附属病院をはじめ多くの大病院の相次ぐ医療事故が報道され、国民の医療に対する不信を招く結果となった。その為、医療事故防止対策の確立は急務とされている。

管理運営では、国立大学附属病院に効率の良い健全経営が求められている。本院は急性期型病院として平均在院日数28日以内を維持する必要があり、また、２：１の看護、つまり看護婦（士）１名が２名の患者を看護する体制を採用している。

21世紀では、社会の変化とニーズに対応した医療を提供する必要があろう。この為には、これまでの我々の医療実績を点検し、外部評価を受けて、より良い附属病院として機能せねばならない。

本医療評価では、前回の自己点検・評価後の1997年度（平成９年度）から2000年度（平成12年度）を主体に、まず各診療科、中央診療施設、特殊診療施設、薬剤部、看護部等の診療実績、臨床研究成績を点検した。また、卒後臨床研修、高度先進医療、臨床試験、地域医療への貢献、医療事故防止体制、病院管理運営等の現状と問題点を明らかにし、さらに今後の課題を挙げた。とくに、今後の課題では本院の機能の充実、社会貢献を果たすための、病院再開発計画についても言及した。

この自己点検・外部評価によって、より優れた医療機関として地域社会に貢献できるよう努力して行きたい。

2001年11月

大分医科大学医学部附属病院長

茂　木　五　郎